

<国内情勢>

「皇位継承と天皇問題を考える」

菅義偉首相が主宰する『**安定的な皇位継承の在り方を検討する有識者会議**（皇位有識者会議）』の第一回会合が、さる3月23日に開催された。

この会議では今後、女性・女系天皇や、女性皇族が結婚後も皇室にとどまる女性宮家創設の是非などが話し合われることになっている。この機会に改めて「**天皇**」について考察したい。

「安定的な皇位継承を考える有識者会議」発足

明仁天皇の生前ご退位に関する「**皇室典範特例法**」は、平成29年（2017年）6月に成立。平成31年（2019年）4月30日に天皇はご退位、5月1日に徳仁天皇がご即位され、元号が「**令和**」に改められた。「**皇室典範特例法**」には付帯決議で「**安定的な皇位継承を確保するための諸課題、女性宮家の創設等**」を重要な課題と明記していた。それから3年9カ月もの間、この付帯決議は無視されてきたが、ついに政府は重い腰をあげざるを得なくなった。

今回決定した、皇位有識者会議メンバーは以下の**6名**である（五十音順）。

大橋 真由美	（46歳、上智大学法学部教授）
清家 篤	（66歳、慶應義塾学事顧問、日本私立学校振興・共済事業団理事長）
富田 哲郎	（69歳、JR東日本会長）
中江 有里	（47歳、女優、文筆家）
細谷 雄一	（49歳、慶應義塾大学法学部教授）
宮崎 緑	（63歳、千葉商科大学教授・国際教養学部長）

菅首相も出席した23日の初会合では、**清家篤**（せいけあつし）氏が座長に選ばれ、今後の議論の進め方などが討議された。専門家などから意見聴取する項目が10点ほど選ばれたが、その中には「**女性・女系天皇**」や「**女性皇族が結婚後に皇族を離れる現行制度の是非**」、「**旧宮家（旧皇族）男系男子子孫の皇籍復帰の是非**」が含まれている。

これから数カ月かけて論点を整理したうえで国会に報告し、各党の意向も踏まえて、秋までの意見集約を目指すという。菅政権は近く解散総選挙に打って出るだろう。

コロナ問題などで支持率が低迷すれば、**任期満了**（10月21日）まで動かないかもしれない。どちらに転んでも、あと7カ月以内に総選挙が行われる。その結果で、第二次菅義偉政権か、自民党新内閣が誕生するのか、政界再編が起きて予定外の政権が出現するのか、予測は難しい。有識者会議の意見集約は新政権発足後となる可能性が高い。

こうした状況下の今、国民全員が「**天皇**」について深く考察するときだと思う。

「皇位継承議論」の前に考えるべき「天皇論」

令和3年3月23日現在（内閣官房皇室典範改正準備室）、皇位継承順位は

第1位 秋篠宮文仁親王（55歳）第2位 悠仁親王（14歳）第3位 常陸宮正仁親王（85歳）

となっている。そして、これに続く皇位継承者はいない。このままでは万世一系の天皇が消滅する恐れがある。愛子内親王が天皇になる道筋をつくるべきだ。

竹田家・北白川家・東久邇宮家など、旧皇族を皇族に復帰させるべきなど、議論百出状態だから、今回の「**皇位継承有識者会議**」は重要な意味を持つ。だがこの重要な会議の前提、根幹とも思われる「**天皇**」についての認識が、あまりに不足しているように思われる。

天皇とは何かという基本が、共通認識から欠落している。そんなことはない。

学術的研究を含め、天皇や天皇問題は十分認識されていると反論されるかもしれないが、今の日本国民はあまりに天皇を知らなさすぎる。天皇とは何か。

今、日本国民に問うと、おそらく**憲法第一条と二条**が出てくるだろう。

第一条 天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、
主権の 存する日本国民の総意に基く。

第二条 皇位は、世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、
これを継承する。

憲法に基づく天皇の認識は、間違っていない。だがよく考えて戴きたい。天皇は憲法が誕生するずっと前から存在していた。憲法による解釈以前に、天皇という存在の本質を認識する必要がある。天皇に関しては、神話や歴史、さらには物語などから研究されることもある。だがそれらは、「**天皇とは何か**」という本質的な問題には立ち入っていない。天皇という漢字の成り立ちを研究して、中国渡来の地位を指す言葉との分析もある。

確かに天皇は、中国の最高神である北極星を指す「**天皇大帝**」という言葉から生まれている。しかし日本の天皇は、古代中国の概念を輸入してつくられた地位ではない。

やまとことば（大和言葉）の「**スベラギ**」「**スメロキ**」（後のスメラミコト）を漢字に翻訳したものである。「**天皇とは何か**」という根源的な分析はなされていない。

「**天皇**」という特別な存在

天皇の「**万世一系**」に対して疑義が出されることは数多い。**武烈天皇**（25代）から**継体天皇**（26代）に代わるときには10親等も遡っており、新王朝が作られたのではないかとの説も強い。**天智天皇**（38代）の後、弟の**天武天皇**（40代）から**称徳天皇**（48代）までは男系男子に引き継がれなかったとの疑義も出されている。

最近で有名な説として「**明治天皇すり替え説**」がある。南朝の血筋を引く**大室寅之祐**（おおむるとらのすけ）が**明治天皇に入れ替わった**との説だ。お耳にしたことがあるかもしれない。

「**明治天皇すり替え**」こそ、真実の歴史だと主張する者は多い。それも、いわゆる陰謀史観論者だけではなく、著名な史家、学者の中にもいる。天皇の本質を理解していないため、こんな暴論がまかり通る。戦後の日本人、特に最近の日本人は、人類史上最高の現実主義者となってしまった。現代科学を絶対的に信奉し、証明されないもの、文献的に認められない説を拒絶する。天皇は生物学的には「**ヒト**」であり、他の人間と変わりのない存在だと確信している。こうした科学妄信の体質が「**明治天皇すり替え説**」を真実の歴史にしてしまう。

ちょっと本筋から外れるが、ここで「**明治天皇すり替え説**」について簡単に考えてみよう。

この説のあらまは、岩倉具視や伊藤博文が孝明天皇を暗殺し、山口県田布施（たぶせ）の**大室寅之祐**という男を**孝明天皇の子（明治天皇）**にすり替えたという説だ。この説には、後に様々な補強がなされ、歴史的真相がたくさん引用されているため、納得する者も多い。

大室寅之祐とは南朝の血を引く人物であるとか、半島からの渡来集落の出身者であるとか、多くの傍説もあり、それらが物語を真実らしく見せている。しかし、幼少時からの明治天皇を熟知している**西園寺公望**に限らず、天皇の周辺には膨大な数の人々、組織が存在している。この暴論は、それらを無視している。周辺の組織だけではない。天皇には人知を超えた不思議な能力が備わっている。それこそが天皇の本質なのだが、陰謀論者には「**天皇の本質**」が見えていない。**天皇は万世一系の存在**である。

万世一系の天皇の本質を理解するには、少なくとも近世の天皇——今日の天皇家の系譜の初めにあたる**15世紀の後花園天皇**（102代）から全ての天皇を眺めていく必要があるが、ここでは省略して、**江戸時代後期の光格天皇**（119代）にスポットをあててみよう。**光格天皇**の父親は**閑院宮典仁**（かんいんのみやすけひと）である。この**閑院宮家**という宮家誕生にも、不

思議さがつきまとっている。戦国時代から江戸時代に至る間、**後陽成天皇**（107代）、**後水尾天皇**（108代）の時代には、**天皇家と信長・秀吉・家康**との関係は良くなかった。**徳川5代将軍・綱吉**の代に限って、天皇家と将軍との関係が劇的に良化した。

犬公方とも呼ばれた**綱吉**は天皇崇拜の念が強い将軍で、江戸時代の中で最も朝幕関係が安定していた。そのため**東山天皇**（113代）の要望が通り、新しい世襲宮家を作り出すことができた。こうして誕生したのが**閑院宮家**である。

その**東山天皇**の後を継いだのは、皇子である**中御門天皇**（114代）だが、35歳の若さで薨去。中御門天皇の皇子・**桜町天皇**（115代）は15歳で即位、27歳で譲位されたが、3年後に病没する。桜町天皇の皇子、**桃園天皇**（116代）は6歳で即位されたが、21歳で亡くなられてしまう。そこで急遽、桜町天皇の内親王（皇女）**後桜町天皇**（117代）がピンチヒッターとして登場。桃園天皇の皇子である**後桃園天皇**（118代）が12歳になったところで**譲位**する。

ところがその**後桃園天皇**が21歳で急死したのだ。このとき、天皇家の近親には、跡を継ぐ人材が見当たらなかった。このままでは天皇家消滅という大危機となる。そんなピンチになって、**東山天皇**の代に作られた新しい世襲宮家・**閑院宮**の存在が急浮上する。

急逝された**後桃園天皇**には生後10カ月の女の子がいた。この女の子と将来結婚するという筋書きで、**閑院宮家**の9歳になる男の子が突如として**天皇**になったのだ。これが**光格天皇**（119代）である。後桃園天皇が急逝されたとき側近はそれを隠し、幕府に対し生後10カ月の**欣子**（よしこ）内親王と**光格天皇**の婚約、光格天皇を後桃園天皇の養子とすることを申し出て、その許可が下りた直後に後桃園天皇の逝去を幕府に報告。**光格天皇**が**踐祚**（せんそ）された。まさに薄氷を踏むような天皇擁立劇だった。

後桃園天皇の遺児と結婚できる9歳の男児が宮家の中に一人だけいたことが幸いだった。

しかも天皇となったこの男児は、信じられないような奇禍が重なって閑院宮家に誕生している。生母である**大江磐代**（おおえいわしろ）という女性は、**伯耆国**（ほうきのくに＝島根県）の身分の低い武士の娘で、生まれたときには「**岩室つる**」という名だった。

若き**つる**は、その後、奉公人から始まり、考えつかないような人生を巡り歩いて閑院宮家で働くことになり、**当主**に見染められて子を孕んだのだが、その子（後の**光格天皇**）は生後まもなく天台宗の聖護院に出され、将来は天台宗の僧侶になる予定だった。

それがある日、突如として**天皇**の養子になり、翌日には**天皇**になってしまったのだ。

あり得ない物語が現実の歴史として展開された。光格天皇の生母、**大江磐代**の**日記**や、その父である**岩室宗賢**の**手紙類**が残り（島根博物館蔵）、詳細を理解することができるが、現実としては考えられない物語なのだ。それを「**偶然**」と見なすか「**必然**」と見なすか。

ここに天皇の秘密が潜んでいる。光格天皇だけではない。天皇の周辺には、到底真実とは思えない「**あり得ない物語**」が何度も出現している。

天皇をめぐる「陰謀史観」の数々

明治天皇すり替え説を始め、天皇の周辺には怪しい陰謀論が渦巻いている。それらの殆どはデタラメである。世の中には、人の知らない「ウラの歴史」や「陰謀論」が大好きな人が多い。そこに天皇排斥を目指す外国勢力が巧みに働きかけ、ウソが真実かのように語られ、肥大化してしまう。例えばこんなデタラメな陰謀論がある。

昭和11年(1936年)に起きた2.26事件の際には昭和天皇の子供がバチカンに囚われの身になった。昭和天皇は拉致され、那須の御用邸に軟禁された。大本營が皇居内に設置され、日本を潰すために日米開戦の計画が作成された…などといった物語だ。

常識で考えれば、あり得ない話だと理解できるだろう。

昭和19年(1944年)7月に米国ブレトンウッズで戦後の金融・経済の枠組みが決められた(ブレトンウッズ体制)が、この会議に昭和天皇が臨席していたなどという大ホラ話もある。

昭和天皇が金塊を提供することで、戦後の世界の枠組みが決められたという物語だ。始めて耳にした人は笑い転げてしまうだろうが、世の中には、こんな作り話を大まじめに受け取る人もいるのだ。日本国憲法第一条の「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」という文言はマッカーサーが作り、日本に押し付けたものだと信じている人も多い。いわゆる「東京裁判史観」によって、「戦後の日本は何もかも米国が作ったもの」と誤解している人がたくさんいる。

GHQのマッカーサーが日本国憲法の草案に向けて注文をつけたことは事実だ。その注文は「マッカーサー・ノート」として現存している。そこには「天皇は国家の元首の地位にある。皇位は世襲される」と書かれている。「象徴」などという言葉は書かれていない。実は昭和18年(1943年)11月にエジプトのカイロで、連合国の首脳3人(ルーズベルト米大統領・チャーチル英首相・蒋介石中華民国主席)が集まり、戦後の日本の体制を協議した事実がある。このとき3者の間で「天皇は日本の元首とする」ことが決められた。マッカーサーは、それを忠実に守って日本側に注文をつけたのだ。ところが、このマッカーサーの注文に、日本の国體護持派が強硬に反発した。神道関係者や仏教僧も加わり、曹洞宗の渡辺樞雄(わたなべはいゆう=のち鶴見大学学長)が有楽町の第一生命ビルにあったGHQ本部に乗り込み、ホイットニー民政局長を叱りとばし、「天皇は日本の元首とする」という一文を変更させている。これがどのような経緯で「象徴天皇」に変わったのか、正確な史料はない。

一説には、天皇を元首としておくと将来、天皇が政治に責任を負わされ、その地位が危うくなる可能性があるから象徴にしたともいわれるが、真相は不明だ。いずれにしても、マッカーサー草案が日本側の注文で変えられたことは事実である。(日本国憲法はその他の部分も日本側の注文で大きく変更されている。)

天皇を誹謗、中傷するような物語も数多く語られている。天皇が入れ替わったとか、皇后には替え玉がいるといった話などだ。その多くは、半島系の勢力がねつ造したデタラメなのだが、陰謀論が好きな人々が信じ様々な異論を展開することで強力な仮説になってしまう。

天皇の本質を理解していないことが根源の理由だ。天皇は世界中の王とは異質な存在であることを理解すべきである。

異空間との接点に立つ存在＝「天皇」

私たちは日常、ニュートン力学やユークリッド空間に生きている。突然こんな話を始めると、頭の切り替えができないかもしれないが、ちょっと我慢して戴きたい。

アインシュタインが相対性理論を発表し始める前から、大宇宙では古典的な科学は通用しないとされてきた。無限とも思われるほど巨大な空間では、地球上の常識は通用しない。

ミンコフスキー空間と呼ばれる現実の宇宙空間は、「空間そのもの」が曲がっているとされるが、想像することすら難しい。いずれにしても、ニュートン力学やユークリッド空間といった古典的な科学は否定され、アインシュタインの相対性理論などが新しい科学となった。

ところが——である。最近になって、宇宙では、アインシュタインの相対性理論も通用しないとの説が浮上し始めている。ビッグバンで宇宙が誕生したとか、光より速いものはないといった常識が壊れ始めている。数学の理論から導きだされた「虚数の空間」——反物質によって構成されている「反宇宙の存在」が浮上してきた。

さらに私たちがいる宇宙と、そこに覆いかぶさっている反宇宙だけでなく、両宇宙を包含する第三の宇宙が存在するともいう。第三の宇宙は、時間と空間を超越する世界で、私たちの宇宙自身もその中に含まれている。——そんなことを言われても、結局どういうことだと問い詰めたくなるが、ここに全ての謎があり、全ての答えがあるらしい。

こうした最先端の科学や数学が辿り着きそうな結論を、遥か昔から伝えてきた学問がある。学問ではなく「言い伝え」と言った方が正しいだろう。古神道の世界の話だ。

天皇家だけに伝えられてきた「白川神道」という秘伝がある。白川神道は「伯家(はっけ)神道」とも呼ばれ、平安時代に花山天皇(65代)の孫が創設したとされるが、白川神道の内部では1万数千年前の縄文時代から存在し、口伝によって引き継がれてきたとされる。

白川神道は文書を残さず、口伝によるものだけだったが、大東亜戦争の真っ只中の昭和18年(1943年)に、白川神道の継承者である鬼倉重次郎が秘伝を一冊の本に纏め、関係者などに配布した。非売品で、二、三百部しか印刷されなかった。国会図書館にすら残されていないが、著者・鬼倉重次郎の遺族やその宗教団体が保存している。(民間の大学図書館でも、この本を所蔵しているところもある。)

この書物は『**禊祓**（みそぎばらい）と**皇道原理**』という。A4版という大きなサイズで総ページは140ページほど。ここには神道の儀式や祝詞（のりと）が記されているが、その中に天皇の存在意義も書かれている。私たちの住む宇宙の裏返しの位置に別な**宇宙**（反宇宙）が存在する。別な宇宙から見れば、私たちの宇宙が反宇宙となっている。その両宇宙を包含する世界が「カミ」であり、**両宇宙の接点**で「**合わせ鏡**」の役割を担う存在が**天皇**だということだ。

この書には、過去・現在・未来と移り、さらに幽界・冥界をめぐる時間軸と、現実宇宙、反宇宙をつなぐ奇妙な五角柱「**天之御柱**（あまのみはしら）」の構造図や、それぞれに接近する儀式・祝詞などが掲載されているが、解説がないと理解できそうにない。

大嘗祭（だいじょうさい）に始まる天皇の儀式に深い意味があると見て取れる。「**天皇家だけの神道**」である**白川神道**は、現代の最先端科学が辿り着いていない全宇宙の構造図を手に入れていたのかもしれない。

「人知を超えた力」を持つ「天皇」

昭和39年（1964年）**10月10日**。台風24号が接近し、オリンピックの開会式は雨天か曇空と思われていたが、抜けるような青空が広がった。

NHKのアナウンサーは「**世界中の青空を全部持ってきたような、素晴らしい秋日和でございます**」と放送。聖火の**最終ランナー**・坂井義則の姿を見た作家の三島由紀夫は「**彼が右手に聖火を高くかかげたとき、その白煙に巻かれた胸の日の丸は、おそらくだれの目にもしみたと思ふが、かういふ感情は誇張せずに、そのままそつとしておけばいいことだ**」と記している。

昭和天皇が開会宣言を行った直後に、自衛隊のブルーインパルス5機が、天皇の真正面の青空に見事な五輪のマークを描き、日本中の人々を驚かせた。後から分かったことだが、ブルーインパルスが五輪のマークを完璧に描いたのは、このときが始めてだった。練習でも成功しなかったという。しかも開会式当日は雨が予想され、ブルーインパルスの隊員たちは「**飛行はない**」と考え、中には酒を飲んで二日酔いだった者もいたという。

接近、上陸するかもしれない台風を彼方に押しやって青空を招き、ブルーインパルスの五輪を成功させた力とは何か。それを「**偶然**」と見なすか、何らかの「**必然**」と見なすか。

昭和39年東京五輪開会式だけの話ではない。俗に「**天皇晴れ**」と呼ばれる現象を、偶然と考えるのか、何らかの力が働いたと考えるか。科学しか理解しない現代の日本人には、想像することすら難しい。だが、恐らく間違いなく、世界のトップクラスの人々はその不思議な能力を理解している。憲法に書かれた文章を分析しても、天皇に迫ることはできない。

神話や歴史的事実を調べても、天皇のことは理解できない。天皇を理解できるのは、本来、日本人だけのはずだ。今年、再び東京で五輪が開催される。これは偶然ではない。何らかの意味を持つ東京五輪なのだろう。

昭和 39 年の東京五輪は、戦後復興を掲げ、そしてこの日から日本は大きく世界に羽ばたいた。令和 3 年の東京五輪は、どんな未来を日本にもたらすだろうか――。

令和 3 年 3 月 23 日、『**安定的な皇位継承の在り方を検討する有識者会議**（皇位有識者会議）』の第一回会合が行われた。これから数カ月をかけて「**女性・女系天皇**」や「**女性皇族**」、「**旧宮家の皇籍復帰**」などが話し合われるという。この機会にぜひ、「**天皇とは何か**」という問題を、日本国民の一人として真剣に考えて戴きたい。■（文責：志波秀宇）